

【第1部】基礎編（Q1～Q20）

Q1. 答え：過去（伝聞）

解説：物語の冒頭定型。「(昔) 男がいた」。伊勢物語の冒頭。

Q2. 答え：過去（「けらし」＝過去「けり」の連体形「ける」＋推定「らし」がつまった形）

解説：カ変「来」連用形「来（き）」＋完了「ぬ」連用形「に」＋「けらし」。「けらし」は「けるらし」がつまった形で、「～たらしい」と訳す。「春が過ぎて夏が来たらしい」。和歌の中の「けり」は詠嘆が多いが、「けらし」の「けり」は「～た」と訳す過去として扱う（「けらし」に詠嘆の気持ちを読み取る説もある）。なお万葉集の原形は「夏来たるらし…衣干したり」で、「夏来にけらし…衣干すてふ」は新古今集・百人一首の形。

Q3. 答え：過去

解説：地の文。「京に上った」。単純過去。

Q4. 答え：詠嘆（気づき）

解説：心の中のことば（「」の中）。来てみて人がいないのを見て、はじめて気づいている。「私の思う人は、もう帰ってしまっていたのだなあ」。気づきの詠嘆。

Q5. 答え：詠嘆（連体形・係助詞「ぞ」の結び）

解説：「ぞ」＋「ける」（連体結び）。戸を開けて見つけたことを喜んで言う会話文の中なので詠嘆。「朝顔の花が咲いていたのだなあ」。

Q6. 答え：過去（伝聞）

解説：体言「僧」の前で連体形。「中国に渡ったとかいう僧」。伝聞調。

Q7. 答え：詠嘆

解説：和歌の中なら詠嘆「月が清く照っているなあ」。

Q8. 答え：詠嘆（気づき）

解説：完了（存続）「たり」連用形「たり」＋「けり」。手紙を見てはじめて知った、心の中のことばなので詠嘆。「古い友は、まだ生きていたのだなあ」。

Q9. 答え：過去

解説：単純な過去の事実。「嵐山に登った」。

Q10. 答え：過去

解説：「(昨夜) 心安く眠った」。地の文の過去。

Q11. 答え：詠嘆（連体形・「ぞ」の結び）

解説：「ぞ」＋「ける」（連体結び）。和歌の中の「けり」なので詠嘆。「花が散ったのだなあ」。

Q12. 答え：過去「けり」已然形「けれ」＋接続助詞「ば」（原因）

解説：「照り」連用＋「けれ」＋「ば」。「月が清く照っていたので、一晩中琴を弾いた」。

Q13. 答え：詠嘆（気づき）

解説：「(知らなかったが) 父が静かに眠っているのだなあ」。

Q14. 答え：詠嘆

解説：朝起きてはじめて気づいたことを言う会話文の中なので詠嘆。「夜のうちに、庭に雪が降っていたのだなあ」。気づきの詠嘆。

Q15. 答え：過去

解説：物語の典型。「男が女のところに通っていた」。伊勢物語に多い。

Q16. 答え：過去

解説：地の文。「風が吹き、波が荒く立った」。

Q17. 答え：過去（伝聞・連体形）

解説：「人」（体言）の前。「たいそう感じ入って素晴らしいと評判だった人」。

Q18. 答え：過去

解説：四段動詞「入る」連用形「入り」＋過去「けり」終止形。「（その人は）学問の道に入った」。

Q19. 答え：詠嘆

解説：断定「なり」連用＋「けり」。泣く姿を見て気づいた心の中のことばなので詠嘆。「この人も子を持つ親であったのだなあ」。

Q20. 答え：過去

解説：「お亡くなりになった」。歴史的事実の過去。

【第2部】標準編（Q21～Q50）

Q21. 答え：詠嘆（連体形・係助詞「なむ」の結び）

解説：「なむ」→連体形結び。朝になって庭を見て気づいたことを言う会話文の中なので詠嘆。「夜の風で、花が散ったのだなあ」。地の文の「なむ～ける」なら過去（Q60）。

Q22. 答え：詠嘆（已然形・係助詞「こそ」の結び）

解説：「こそ」→已然形結び。別れたあとで気づいた心の中のことばなので詠嘆。「私こそ、この人を本当に愛していたのだなあ」。

Q23. 答え：過去（連体形・疑問の係助詞「や」の結び）

解説：「や」係助詞→連体結び。「昨夜、笛の音が聞こえたか」と、前のできごとを尋ねる文なので「けり」は過去。疑問の意味は「や」が表す。

Q24. 答え：過去（連体形・疑問の係助詞「か」の結び）

解説：「たれか」の「か」（疑問の係助詞）→連体結び「ける」。疑問の意味は「か」が表し、「けり」は過去。「この花は、誰が折ったのか」。

Q25. 答え：過去

解説：「帝はたいそうお思いになった」。地の文の過去。

Q26. 答え：過去「けり」已然形「けれ」＋接続助詞「ど」（逆接）

解説：「降り」連用＋「けれ」＋「ど」。「雪が降ったけれど、出かけた」。文末の「出でぬ」は下二段「出づ」連用形＋完了「ぬ」終止形（打消なら「出でず」）。

Q27. 答え：過去

解説：和歌を「詠んだ」という地の文。過去。

Q28. 答え：過去

解説：地の文での「詠んだ」。歌そのものではない。

Q29. 答え：（参考）推定の助動詞「らし」（「けらし」＝過去「けり」の連体形「ける」＋「らし」がつまった形）

解説：傍線部はけりではなく推定「らし」。「来」はカ変の連用形「来（き）」、「に」は完了「ぬ」の連用形。「けらし」は「けるらし」がつまった形で、「～たらしい」と訳す。「春が来たらしい」。

Q30. 答え：過去

解説：「見」連用＋「ける」連体＋体言「夢」。「あの僧が見た夢が、まさに現実になった」。自分が見た夢なら、ふつうは体験の過去「き」を使って「わが見し夢」と言う。

Q31. 答え：過去「けり」已然形「けれ」＋接続助詞「ば」（原因）

解説：形容詞カリ活用連用＋「けれ」＋「ば」。

Q32. 答え：詠嘆

解説：完了「ぬ」連用「に」＋「けり」。物語を読んでいて、日が暮れたことにはじめて気づいた会話文の中なので詠嘆。「いつのまにか日も暮れてしまったのだなあ」。「にけり」の形だから詠嘆と決まるのではない（地の文の「にけり」は過去。Q89）。

Q33. 答え：完了の助動詞「たり」の連体形（「ぞ」の結び。過去「けり」ではない、参考問題）

解説：「言ひ伝へ」（下二段「言ひ伝ふ」連用形）＋「たる」（完了「たり」の連体形。ここでは存続「～ている」。係助詞「ぞ」の結び）。「古今集に載っている歌であると言い伝えている」。「けり」との混同に注意。

Q34. 答え：詠嘆

解説：動詞「なる」連用形「なり」＋完了「ぬ」連用形「に」＋「けり」。会話文の中で、時がたったことに気づいて言っているので詠嘆。「鶯が鳴くようになってから、長い時がたったのだなあ。春もきっと終わってしまうだろう」。

Q35. 答え：過去（連体形）

解説：打消「ず」連用「ざり」＋「ける」連体形＋体言「こと」。体言を修飾する地の文の「ける」なので過去。「世の中の人が知らなかったことを、この翁はよく知っていた」。

Q36. 答え：過去

解説：「詠みけり」は地の文の過去。

Q37. 答え：過去「けり」已然形「けれ」＋接続助詞「ど」（逆接）

解説：「思ひ」連用＋「けれ」＋「ど」。「たいそうかわいそうだと思ったけれど、口に出しては言わなかった」。

Q38. 答え：過去

解説：「吹かせたまひ」（四段「吹く」未然形＋尊敬の助動詞「す」連用形＋尊敬の補助動詞「たまふ」連用形＝二重敬語。帝への最高敬語）＋「けり」。地の文の過去。「雪の降る夜、帝は笛をお吹きになった」。

Q39. 答え：詠嘆

解説：感嘆詞「あはれ」を伴う。「ああ、夢だったのだなあ」。気づきの詠嘆。

Q40. 答え：過去（連体形）

解説：完了「ぬ」連用「に」＋「ける」連体＋体言「桜」。体言を修飾する「ける」は「～た」と訳す過去。「散ってしまった桜が、やはり惜しい」。

Q41. 答え：詠嘆

解説：「老いに＋けり」。「私もまた老いてしまったのだなあ」。気づき。

Q42. 答え：過去

解説：地の文の過去。「中宮はご覧になって、お思いになった」。

Q43. 答え：過去（連体・伝聞）

解説：「住み」連用＋「ける」＋体言「人々」。「故郷に住んでいた人々」。

Q44. 答え：過去「けり」已然形「けれ」＋接続助詞「ど」（逆接）

解説：「見」連用＋「けれ」＋「ど」。「明け方の月を見たけれど」。

Q45. 答え：過去

解説：「疑った」。心情描写の過去。

Q46. 答え：過去（連体形・「ぞ」の結び）

解説：「ぞ」係助詞→連体結び。地の文の「詠まれた」。

Q47. 答え：形容詞ク活用已然形語尾「けれ」（過去「けり」ではない）

解説：「遠し」（ク活用）已然「遠けれ」＋「ど」。識別最難関の引っ掛け。直前が連用形でないので過去ではない。

Q48. 答え：過去

解説：形容詞「いみじ」（シク活用）のかり活用連用形「いみじかり」＋「けり」。地の文で出来事を述べているので過去。「その夜、雷がひどく鳴って、その音はすさまじかった」。「～かりけり」の形だけでは詠嘆と決まらない。

Q49. 答え：過去（連体形）

解説：「告げ」連用＋「ける」＋体言「人」。「私に告げた人はいない」。

Q50. 答え：詠嘆（連体形・「ぞ」の結び）

解説：百人一首・源宗于。「ぞ」→連体「ける」結び。「山里は冬こそ寂しさが増すものだったのだなあ」。和歌中の詠嘆典型。

【第3部】応用編（Q51～Q80）

Q51. 答え：過去

解説：尊敬「思しめす」連用＋「けり」。「たいそう可愛いとお思いになった」。

Q52. 答え：過去

解説：「住み」連用＋「ける」連体＋体言「里」。地の文の過去。「あの人が住んでいた里は、今はすっかり荒れてしまった」。

Q53. 答え：過去「けり」已然形「けれ」＋接続助詞「ば」（原因）

解説：形容動詞ナリ連用＋「けれ」＋「ば」。

Q54. 答え：（参考）反実仮想「まし」

解説：傍線部はけりではなく「まし」。「恋ひ死なば」（未然形＋ば＝假定）を受けた帰結で、「（もし恋い死んだら）誰が『あわれ』と言ってくれるのか、いや誰も言うまい」（「かは」は反語）。「～ば…まし」の反実仮想。

Q55. 答え：詠嘆（連体形「ける」＋詠嘆の終助詞「かな」）

解説：形容詞「長し」のかり活用連用形「長かり」＋「ける」（連体形）＋終助詞「かな」。眠れずにいて秋の夜の長さに気づいたひとりごとなので詠嘆。「秋の夜は、こんなにも長いものだったのだなあ」。「～けるかな」は詠嘆の形。

Q56. 答え：詠嘆

解説：形容動詞「哀れなり」連用形「哀れに」＋丁寧の補助動詞「侍り」連用形＋「けり」。会話文の中で、今の思いを述べているので詠嘆。「物思いの尽きない夜の長さを思うと、何事もしみじみと心にしめることでございますなあ」。

Q57. 答え：過去

解説：「御覧じ」連用＋「ける」＋体言「夜」。

Q58. 答え：過去「けり」已然形「けれ」＋接続助詞「ば」（原因）

解説：「目覚め」（下二段「目覚む」連用形）＋「けれ」＋「ば」。「鶯の声で目が覚めたので、起きて庭に出た」。

Q59. 答え：過去

解説：「思ひ」連用＋「けり」。「」の中の心のことばを受けて「～と思った」と述べる地の文なので過去。「『待ったかいがあって、あなたが来てくださったのだなあ』と思った」（「」の中の「こそ～けれ」は詠嘆）。

Q60. 答え：過去（連体形・「なむ」の結び）

解説：「なむ」係助詞→連体結び。地の文で出来事を述べているので過去。「その夜、中將が参上した」。

Q61. 答え：（参考）現在の原因推量「らむ」連体形（係り結び）

解説：傍線部はけりではなく「らむ」。係助詞「か」（疑問）＋「わびしかる」（形容詞「わびし」かり活用連体形）＋「らむ」連体形（「か」の結び）。「来ない人を待つ夕暮れの秋風は、どのように吹くから（こんなに）わびしいのだろう」。

Q62. 答え：過去

解説：「問ひ」連用＋「けり」。地の文の過去。「お使いが帰ってきたので、（向こうの）様子をていねいに尋ねた」。

Q63. 答え：過去（已然形・係助詞「こそ」の結び）

解説：「こそ」係助詞→已然結び。地の文で人々の様子を述べているので過去。「人々は、この別れをたいそう嘆いたのだった」。

Q64. 答え：過去

解説：「尋ね」（下二段「尋ぬ」連用形）＋「けり」。地の文の過去。「もともと知っていたことだけれど、それでも人に尋ねた」。

Q65. 答え：過去（連体形・疑問の係助詞「や」の結び）

解説：「や」係助詞→連体結び。「この手紙を、人に見せたのか」と、前にしたことを尋ねる文なので「けり」は過去。疑問の意味は「や」が表す。

Q66. 答え：過去「けり」已然形「けれ」＋接続助詞「ば」（原因）

解説：「積もり」連用＋「けれ」＋「ば」。

Q67. 答え：過去

解説：「詠み」連用＋「けり」。歌のあとの「と詠みけり」は歌の外の地の文なので過去。「～と詠んだ」。

Q68. 答え：過去（連体形）

解説：完了「たり」連用＋「ける」＋体言「人々」。

Q69. 答え：形容詞シク活用「悲し」の已然形「悲しけれ」の一部（過去「けり」ではない）

解説：「悲しけれ」はシク活用形容詞の已然形（語幹「悲」＋活用語尾「しけれ」）。引っかけ。直前は連用形ではない。

Q70. 答え：詠嘆

解説：動詞「なる」連用形「なり」＋「けり」。秋風を聞いて自分の心に気づいた、心の中のことばなので詠嘆。「もの悲しくなったのだなあ」。

Q71. 答え：過去（連体形・係助詞「ぞ」の結び）

解説：「ぞ」係助詞→連体結び。地の文で出来事を述べているので過去。「使いの者が、このことを告げたのだった」。

Q72. 答え：過去

解説：「住み」連用＋丁寧の補助動詞「侍り」連用形＋「けり」。会話文の中でも、昔のことを聞き伝えのとおり語る「けり」は過去（伝聞）。「昔、この寺に尊い聖が住んでおりました」。

Q73. 答え：過去

解説：「植ゑ」（ワ行下二段「植う」連用形）＋「ける」＋体言「梅」。地の文の過去。「亡くなった大臣が植えた梅が、今年もたいそう美しく咲いている」。

Q74. 答え：過去「けり」已然形「けれ」＋接続助詞「ど」（逆接）

解説：「侍り」連用＋「けれ」＋「ど」。

Q75. 答え：過去

解説：「まさり」（四段「まさる」連用形）＋「けり」。地の文で男の様子を述べているので過去。「手紙の返事もないので、男はいつそう恋しさがつのった」。

Q76. 答え：詠嘆（連体形・「ぞ」の結び）

解説：断定「なり」連用形「に」＋係助詞「ぞ」＋う変「あり」連用形＋「ける」（「ぞ」の結び）。「にぞありける」は「なりけり」の間に「ぞ」が入った形。庵を見て気づいた心の中のことばなので詠嘆。「理想的なありさまであったのだなあ」。

Q77. 答え：過去

解説：「住み」連用＋「けり」。地の文の過去。「人も通わない深い山に、翁がひとりで住んでいた」。

Q78. 答え：詠嘆（連体形・「ぞ」の結び）

解説：形容詞カリ活用連用＋「ける」（「ぞ」の結び）。「我れ」が自分のことに気づいて言う文なので詠嘆（「～かりける」の形だけで決まるのではない）。「知らないことが多いのだなあ」。

Q79. 答え：詠嘆（已然形・係助詞「こそ」の結び）

解説：打消「ず」連用「ぎり」＋「けれ」（「こそ」の結び）。相手が去ったあとで気づいて悔やむ心の中のことばなので詠嘆。「ああ、思っていることを言わなかったのだなあ」。

Q80. 答え：詠嘆

解説：形容詞「なし」のカリ活用連用形「なかり」＋「けり」。嘆いて言う会話文の中のことばなので詠嘆。「ほんの少し見えたほどの面影さえも、ないのだなあ」（「夢ばかり」は「ほんの少し」の意）。

【第4部】入試レベル（Q81～Q100）

Q81. 答え：過去

解説：物語冒頭の地の文。「住んでいた」。

Q82. 答え：過去（連体形）

解説：「いひ」（四段「いふ」連用形）＋「ける」（連体形）＋係助詞「は」。「～たのは」と訳す地の文の過去。「そこを八橋と言ったのは、川の流れが蜘蛛の足のように分かれているので、橋を八つ渡してあることから、八橋と言ったのだった」（文末の「なむ～いひける」も過去）。

Q83. 答え：過去

解説：「使ひ」（四段「使ふ」連用形）＋「けり」。物語の冒頭の地の文なので過去。「（取った竹を）いろいろなことに使っていた」。

Q84. 答え：形容詞ク活用「なし」の已然形「なけれ」の活用語尾（「こそ」の結び。過去「けり」ではない、参考問題）

解説：「なけれ」は形容詞「なし」（ク活用・語幹「な」）の已然形で、係助詞「こそ」の結び。「こそ～けれ」の形でも、「けれ」の上が連用形でなく形容詞の語幹なら助動詞「けり」ではない。「世の中よ、（つらさからのがれる）道はないのだ。思いつめて入った山の奥でも、鹿が（悲しげに）鳴いているようだ」。

Q85. 答え：強意の係助詞「ぞ」（結びは連体形「思ふ」。「けり」を含まない、参考問題）

解説：「ぞ」は強意の係助詞で、結びの「思ふ」は連体形（四段動詞は終止形と連体形が同じ形）。この歌に「けり」はない。「（岩にせきとめられて分かれた急流がまた一つになるように）今は別れても、のちにはきつと逢おうと思う」。

Q86. 答え：完了の助動詞「り」の連体形（「ける」ではない、参考問題）

解説：「詠め」（四段「詠む」已然形）＋「る」（完了「り」の連体形）＋体言「歌」。「り」はサ変の未然形・四段の已然形に付く。「～と詠んだ歌である」。「ける」との混同に注意。

Q87. 答え：過去

解説：地の文の「詠んだ」。

Q88. 答え：詠嘆（連体形・係助詞「ぞ」の結び）

解説：「知る」＋助動詞「べし」の連用形「べかり」＋「ける」（係助詞「ぞ」の結びで連体形）。和歌の中の「けり」なので詠嘆。「月の明るい夜には、（白い梅の花は月の光にまぎれて）それと見分けられない。梅の花は香をたずねてこそ、ありかを知ることができるのだなあ」。

Q89. 答え：過去

解説：完了「ぬ」連用「に」＋「けり」。歌を詠んだあとの男の行動を述べる地の文なので過去。「夜がほのぼのと明けるところに、泣く泣く帰っていった」。「にけり」の形でも、地の文なら過去。

Q90. 答え：現在の原因推量の助動詞「らむ」（参考問題）

解説：花が散っているのは目の前のことで、その理由を推し量る「らむ」（現在の原因推量）。「日の光がのどかな春の日に、どうして落ち着いた心もなく花が散っているのだろう」。この歌に「けり」はない。

Q91. 答え：詠嘆（連体形・「ぞ」の結び）

解説：「ぞ」→連体「ける」結び。「世の中の人々の心で花であったのだなあ」。和歌中の詠嘆典型。最頻出。

Q92. 答え：過去「けり」已然形「けれ」＋接続助詞「ば」（原因）

解説：「詠み」連用＋「けれ」＋「ば」。歌のあとの地の文。「～と詠んだので、人々はみな感心しあった」。

Q93. 答え：完了の助動詞「たり」の連体形（二つとも存続「～ている」。「けり」ではない、参考問題）

解説：「紫だち」「たなびき」（どちらも四段の連用形）＋「たる」（完了「たり」の連体形・存続）。一つめは体言「雲」に続き、二つめは文末の連体止め。「紫がかっている雲が細くたなびいている（のがよい）」。

Q94. 答え：過去（連体形）

解説：「思ひはじめ」（下二段「思ひはじむ」連用形）＋「ける」（連体形）＋体言「こと」。作者は少女時代の自分を「生ひ出でたる人」と人ごとのように書いているので、自分の昔のことでも「き」でなく「けり」を使っている（地の文の過去）。「どのように思い始めたことであろうか」。すぐ前の「怪しかりけむ」の「けむ」は過去推量なので、見まがえない。

Q95. 答え：過去（連体形）

解説：尊敬「たまふ」連用＋「ける」＋体言「中」。「(多くの女御や更衣がお仕えしていらっしやった) 中で」。源氏物語冒頭・難関大最頻出。

Q96. 答え：過去

解説：「あり」連用＋「けり」。冒頭の有名な「ありけり」。

Q97. 答え：使われていない（「けり」を含まない、参考問題）

解説：文末は「あり」「あらはす」「ごとし」「滅びぬ」「同じ」で、過去の「けり」は使われていない。「滅びぬ」の「ぬ」は完了、「奢れる」の「る」は完了（存続）「り」の連体形。世の中の道理を述べる文なので、過去の助動詞を使わない。

Q98. 答え：形容詞シク活用「ものぐるほし」の已然形「ものぐるほしけれ」の一部（過去「けり」ではない）

解説：「こそ＋ものぐるほしけれ」（係り結び・已然形結び）。シク活用形容詞の已然形であり、過去「けり」ではない。最頻出引っかけ。

Q99. 答え：完了の助動詞「たり」の連体形（存続「～ている」。「けり」ではない、参考問題）

解説：「とどまり」（四段「とどまる」連用形）＋「たる」（完了「たり」の連体形・存続）＋体言「ためし」。「長くとどまっている例はない」。「けり」と区別する。

Q100. 答え：過去（連体形・「なむ」の結び）

解説：「なむ」係助詞→連体「ける」結び。「『あれは何か』と男に問うたのだ」。伊勢物語芥川段・難関頻出。